

Photographic Society of Zone System

ゾーンシステム研究会 会報

発行日：2010.6

発行者：中島秀雄

事務局：畑文夫

編集部：荒井崇

NO.46

CONTENTS

- ・ 銀塩写真の魅力・・・ゾーンシステムを巡って(3)
- ・ エーゲ海キクラデス諸島の撮影と佐藤理氏の工夫
- ・ 早川与志子氏講演「フォトジャーナリズムと社会：写真展を企画する」



銀塩写真の魅力 ゾーンシステムを巡って (3)

中島秀雄

新たな仕事は、男と女がテーマになっていた。通常より薄めに仕上げたネガからストレートにプリントしてみたが、イメージは弱く作品にはならなかった。次に、製版用フィルムに転写してポジを作り、反転したネガからプリントしてみた。しかし、これもうまういかなかった。そこで、部分画像マスクを作り、プリント露光の際に光を弱めたり強めたりする方法に切り替えてみたところ、これはうまく行った。しかし、画像マスクを操作するためにはもう1人の助手を必要とするときもあり、お互いの呼吸が合うまで何度も失敗した。5枚プリントして1枚成功程度の確率で、ときには画像マスクを作り直すこともあった。結局、全作品の完成まで半年間、根気と集中力を必要とする仕事になった。この仕事は、写真表現の可能性を広げる貴重な経験にはなったが、いくらうまく出来たとしても私の作品を作ったわけではなく、満足感はすぐに消えてしまった。そして、この経験から私は、写真の全てを1人で進めるためには、撮影から現像、プリントまで、よどみない技法を構築しなければならないと考えるようになった。

一日の仕事が終わった後の楽しみは、写真集や海外から収集したオリジナルプリントを眺めることだった。ウィン・バロック、エドワード・ウエストン、中でもアンセル・アダムスのシャープなファインプリントには、印刷では味わえない深い黒から豊かなハーフトーン、そして、輝くようなハイライトに写真の美しさ、強さを感じ、写真に関ってきた幸福感、これからも写真を続けることの決意のようなものを感じさせてくれた。同時にどうしたらこんなプリントが出来るのか、写真

が撮れるのか、新たな好奇心と欲望がプリントを持つ指先から伝わってきた。

仕事が終わるのは夜中になることもある。この日は、いつもと違う本棚に目が向いた。写真集の黒い背表紙に挟まれ、黄色の小さな本に目が止まった。ZONE(ゾーン)という文字が目に入った。

注) 上記記事は、2009年6月9日～6月27日開催の「銀塩写真の魅力」展（ギャラリーときの忘れ物）開催時の小冊子／ブログ用に書かれた文からの引用です。

エーゲ海キクラデス諸島の撮影と 佐藤 理 氏の工夫

古谷津純一

佐藤理氏は、スタジオを経営し写真を職業としている一方、仕事の傍ら趣味として 8x10 カメラで黑白ファインプリント作品を作っている写真作家でもある。氏は 8x10 のカメラを連れてギリシヤのエーゲ海キクラデス諸島を 3 回にわたり撮影し、2009 年 4 月にはギャラリーコスモスで個展「ギリシヤの白」を開催した（図 1）。



図 1. 佐藤氏の個展の案内状

8x10 のカメラを用いて海外で撮影する・・・かなりの覚悟がないと実行には至らないと思う。さらに、作品に対する集中心が人一倍強く、フィルム上に現れる細かな現象をも徹底的に解明し、改善するための工夫と努力を惜しまない。以下、氏の作品作製のための種々の工夫やエーゲ海での撮影エピソードなどについてお話いただいた内容に基づき、特に工夫点につきその要旨を報告する。

【カメラとアクセサリーの工夫】

1. 蛇腹の遮光対策

「このカメラの蛇腹内面は、実は黒くないんです。そのため、特に山折りの部分の内面反射が、写真に影響します。そこで内面に無（低）反射性の素材を貼りつけました。しかし、全体に貼りつけると蛇腹が厚くなり折畳めなくなってしまうため、フィルム面に近い部分にのみ貼り付けました。」カメラ内部を拝見すると、確かに純黒の生地が丁寧に貼りつけられている。さらに黒色艶消し塗料で蛇腹内部を全面塗装したそうである。塗料は水溶性で乾燥すると水に溶けない性質のものを使用する。このためにエアブラシまで購入し、これに塗料を装填して塗装している。スプレー式で同等の塗料があれば、これを使用する事も可能だそう。いずれにせよ、蛇腹に起因する反射を極力抑えることが大切であり、特に氏のようにイメージサークルの大きな超広角レンズを用いる場合には、決定的な差がでるという。

早速自分のカメラをチェックすると、なんとレンズボード枠内面が、外面と同様に茶色く塗装されていることに気づき、水溶性艶消しスプレーを購入して塗装しました（図 2）。



図 2. カメラ内部を塗装するため新聞紙でマスキング

2. カメラ枠の遮光対策

木製カメラは、国内で使用していて問題がなく

ても、高温で乾燥した地域に持ち込むと、障害が出る可能性があるという。氏のカメラは、フィルムホルダーを挿入する枠組み（縦・横に変換する際に取り外す部分）が微妙に反ってしまったそうである。このことは、光線引きの大きな原因になるため、研究会会員の皆さんもご注意くださいとのこと。（ただし、部材の厚さとサイズを考慮すると、4x5 カメラより 8x10 カメラのほうが、現象が出やすいと考察します。）このため、枠組みの取り付け部分に黒く塗装した板を貼りつけて、光線引きを防止する工夫を施していた。氏のいわく、「自分で使うと決めて買ったカメラだから、見た目よりも実用・・・」納得。

3. 蛇腹の工夫

通常の木製フィールドカメラの蛇腹の形状は、フィルム側はフィルムが縦でも横でも装着できるように正方形で、開口面積も広いが、レンズ側に向かうにしたがって、開口面積が小さくなっていく。カメラを組み立てると、蛇腹はほぼ均等に伸びるため、どうしても開口面積の小さい部分も使用することになる。しかし、先の①で述べた蛇腹内部における内面反射や、後レンズとの干渉などの点で不利であるといえる。このため、小型蛇腹部分を強制的に手繰り寄せて折り畳み、レンズボートと後部側の大きな蛇腹をクリップと紐で固定して、大きな蛇腹部分を活用する工夫をしていた。

材料（最低クリップと紐か輪ゴム）さえあれば、その場で調整できるため、準備しておくも重宝するかもしれません（図3）。

4. レンズボードの工夫

氏は建築物の撮影を主としているため、カメラ

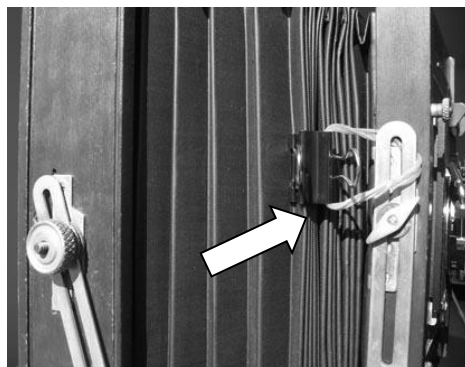
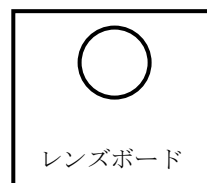


図3. クリップと輪ゴムで小さい蛇腹を手繰り寄せて固定

ムーブメントにライズは欠かせない。しかし、超広角レンズを用いた場合、イメージサークルが確保されていても、特にライズ（シフト）時に蛇腹が干渉し制限がかかる場合が多い。袋蛇腹を使用すれば問題ないが、氏はレンズボードの上部に穴あけ加工をすることで、カメラにセットした時点ですでにライズ状態を確保している。（図A）これにカメラ側でのライズを加えれば、蛇腹干渉による制限は少なくなる。（私見ですが、ボードとカメラの噛み合いがうまくいけば、下向きにセットすればフォーカス、横向きにセットすればシフトも確保できると思います。）



図A. レンズボードの上部に穴を開けレンズを取り付けると、それだけライズしたことになる。

5. 冠布の工夫

大判カメラでの撮影に必須なアイテムの一つに冠布がある。会員の皆さんの多くは、市販されている冠布を使用していると思われるが、ここでも一工夫していた。冠布とカメラのレンズ枠上部にそれぞれマジックテープを貼りつ

けることで、冠布をカメラに固定して風などによる障害を防いでいる。さらにカメラフィルムホルダー枠の下面から漏れる光線を短冊状に切った黒い布をフィルムホルダー枠の下面にマジックテープで貼りつけることで遮光し、ピントガラス全体を見やすくしていた。

6. フィルターホルダーの作製

晴天の青い空に白く輝くキクラデス諸島の白い建物・・・こんな風景にフィルターワークは欠かせない。フィルターの固定に市販の「バネ式」のホルダーも使用してみたが、思いの外フィルターに傷がつくという。そこで簡単な工作で実用度の高いフィルターホルダーの作製に至ったそうだ。

（私も現場でフィルターを常用しますが、右手で逆光線を遮光し左手でフィルターを使用すると、リリースを押す手がないことに気がつく（笑）。また、手でフィルターを使用すると、風による障害やフィルターの位置に気をを使うあまり撮影に集中できないことも多い。レンズに固定すれば良いが、特に口径の大きな超広角レンズの場合、フィルター径の問題やケラレの問題が発生して困っていました。）早速、当日の話を参考に自分で作製してみました。

●準備するもの

- ・5mm 厚程度のパネルボード（ハレパネなどのようなボードで接着剤のついてないもの）
- ・サークルカッター（100 円台から 2,000 円台まで様々あるが、100 円台の商品を購入しました）
- ・両面テープ
- ・定規
- ・鉛筆
- ・適度の厚さの紙（シートフィルムに入っている

白紙など）

- ・水性黒色塗料（スプレー式が使いやすい、ポスターカラーなども可）

●作製手順

a) フィルターホルダーの作製

①フィルター枠を作製します。100mm x 100mm のフィルターであれば、100mmx240mm 程度の厚紙（シートフィルムに梱包されている白紙など）を準備します。

②これを長軸の 120mm の位置で二つに折り、この折り目から 100mm x100mm の正方形を想定して、この中央にサークルカッターで 95mm 径の穴を開けます。（サークルカッターでの切り抜き作業は、一回で切り込もうとせず、数回トレースして切り抜くのがコツで、慣れると気持ちの良い穴が開きます。）

b) フィルターホルダーアタッチメントの作製

①縦 120mm 横 120mm 厚さ 5mm のパネルを用意します。

②このパネルの中央に、使用するレンズの口径（外側）に合わせた穴をサークルカッターで開けます。

③パネルと同じ大きさの厚紙を準備し、パネルの穴と同一部位に、パネル穴の直径と同じサイズかやや大きめの穴を切り抜きます。

④さらに、パネルと同じ大きさの厚紙（先の厚紙

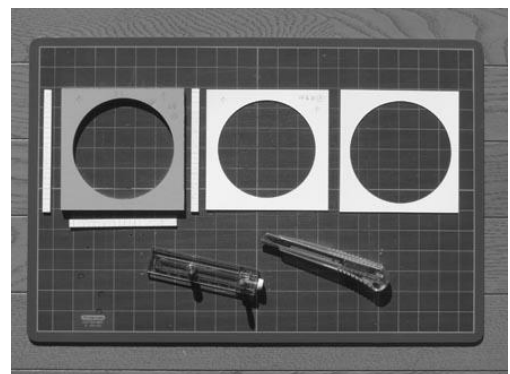


図4. パネルボードと厚紙の切りぬき

と同様の紙)を準備し、パネルの穴と同一部位に、パネル穴直径より 1mm 小さな穴を切り抜きます(④はストッパーになりますが省略可能)。

c) フィルターホルダー挿入枠の作製

①b)で作製したフィルターホルダーアタッチメント(パネル)とb)-③で作製した厚紙の間に、厚紙などを貼りつけてスペースを設け、a)で作製したフィルターホルダーが自由に出し入れできるようにします(図4)。

d) 塗装(後群レンズに装着する場合は必須)

全体を艶消しの黒で塗装します。撮影時にレンズの前側に装着する場合は塗装しなくても使用できますが、後群レンズに装着する場合は、撮影時の内面反射防止のために塗装は必須です。

*工作に先立ち、日常的に使用するレンズの前群と後群の外側口径を計測しておくと思いいます。たとえば異種レンズでも前群と後群の径が同じ場合があり、このとき一つ作製すれば共用できるからです。

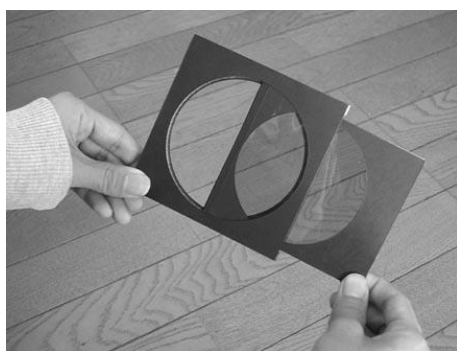


図5. フィルター挿入

使用方法

- ① フィルタをホルダーではさむ
- ② ホルダーをアタッチメントに挿入(図5)
- ③ アタッチメントをレンズに装着(図6, 7)



図6. フロントレンズに装着



図7. バックレンズに装着

【その他の話題】

1. 凸面の大きなレンズ使用時の写り込み

Nikkor SW シリーズのような超広角レンズで、前玉が大きく凸面を形成するタイプのレンズをf32以上に絞って使用すると、画面中央にモヤッと何かが写り込む現象を経験した。おそらくは、空が写り込んでいるものと考え、ニコンのサービスセンターに問い合わせたところ「絞らないで撮影してほしい」と回答があったそうだ。このタイプのレンズを使用している方はご注意ください。

2. 三脚の話

氏はGitzoの三脚を使用しているが、センターポールを外すことで軽量化を図っている。

* 私はカメラぶれを考慮し、センターポール(エ

レベータ)は使用しませんが、残念ながらポールを外せません。外せるタイプの三脚をご使用でしたらご検討ください。

3. フィルム現像の話

8x10 フィルムを2枚同時にトランプ形式のトレイ現像を実施している。底板に溝のついたプラスチック製のトレイでは、現像ムラが生じることがあるため、ステンレス製の底面の平らなものを使用する。現像液はD76を1:2に希釈して使用することで、コントラストの高くスケールオーバーなギリシアの白い建築物などの被写体に対して対応している。

4. コンタクトプリントの話

いわゆるプルーフプリントは RC ペーパーを使用し、作品としてのコンタクトプリントは 11x14 サイズのバライタ紙を用いている。フィルムよりわずかに薄いプラバンに 8x10 用の窓を開けて 11x14 の紙に対する位置決めと、全面への密着圧の均等化を図っている。特筆すべきは、プラバンにフィルムノッチまで丁寧に切り抜いており、仕上がったプリントは大変美しい。

まとめ

氏はギリシャキクラデス諸島に 8x10 を持ち込む前に 35mm カメラで視察を行なっている。自身の体力で他国での 8x10 撮影が可能かどうかを検討しながらロケハンしたという。そして本番では車両の乗り入れが禁止されているため、8x10 カメラを 50cc のレンタルバイクに積んで移動しながら撮影した。また異国ならではの人々とのかわり合いも経験したそうだ。たとえば、通常は撮影できない修道僧も遠い国日本からの撮影旅行という理由で撮影が許可されたり、撮影に邪魔な落

ち葉などを街の人が掃除してくれたりなど暖かなふれあいも沢山あったという。

「人を撮影する場合、とにかくダメモトでコンタクトすると良いでしょう。もしも、そこから会話が弾めば、良い写真が撮れるでしょう。」



図 8. 8 x 10 の愛機を使って講演中の佐藤理氏

氏の作品づくりに対する情熱を強く感じたレクチャーであり、大変参考になりました。ありがとうございました。(平成 21 年 12 月例会にて)



図 9. 佐藤理氏の作品

早川与志子氏講演 「フォトジャーナリズムと社会： 写真展を企画する」 (研究会総会での講演会)

浜野次郎

- ・日時：2010年2月6日（土）15～17時
- ・会場：横浜市市民活動支援センター会議室

早川与志子さんは現在明治大学で教鞭をとっておられますが、日本テレビ事業局在職時代、約20年にわたり質の高い美術展/写真展のプロデューサーとして活躍されました。その貴重な経験をもとに独自の写真観を語っていただいた2時間の講演は「記録」「メディア」としての写真の本質を深く考えさせるものでした。

生い立ちと平木収氏との出会い

- 写真との関わりは父がきっかけ。新聞記者だった父は常にカメラをぶら下げていた。また、家には土門拳などの写真集があり、写真は身近な存在だった。
- もともと映像好き。本当は映画監督になりたかったが、女性はほぼ不可能と言われ、ドキュメンタリーに憧れてテレビ局に入った。国際部や番組制作の仕事をした後、米国に留学、映像メディアを社会学的視点で学ぶ機会があり、写真に再び興味を持った。帰国後、事業局に配属、展覧会の担当になった。
- 事業局での最初の企画として女性写真家マーガレット・パーク=ホワイトの写真展を思い立ち、川崎市市民ミュージアムに相談に行ったのが平木収氏との最初の出会。その後20年近く、写真展のプロデューサーと監修者という関係で一緒に仕事をした。中島代表とは平木氏のお別れの会と別の展



覧会で面識を得た。本日の講演も平木氏がとりもってくれたという因縁を感じる。

最初の展覧会―パーク=ホワイト展

- パーク=ホワイト展の準備には4年かかった。当時は東京でも写真展を開催する美術館は西武美術館などきわめて限られており、写真を見るために入場料を払うという文化的習慣がなかった時代。全国4会場を確保するのに非常に時間を要した。
- 新聞社による展覧会主催は長い歴史があるが、テレビは後発。当時の日本テレビは、「文化事業の理念は文化貢献、社会還元」ととらえ、あまり収益についてうるさく言われなかった。また、企業による社会貢献のメセナ活動も盛んで、文化事業を経済的に支援する風潮があり、理想的な時代だった。しかし、バブル経済の崩壊と共にメセナも影をひそめて、収益重視の方向に歩き出した。欧米の文化活動と異なり、日本社会は文化的に底の浅い、脆弱な国だと感じる。
- 米国の女性肖像写真家アニー・リーボビッツなど、アート写真の企画もいくつか手がけたが、基本的にドキュメンタリー写真への興味が深い。メッセージ性の強い写真が好きだ。本能的にアンハッピーなものに惹かれる一面があり、戦争、差別、公害、自然破壊など、人間が作り

出した負の遺産を取り上げ、次世代にきちんと伝えたいと思う。

「20 世紀の証言 ピュリツァー賞写真展」 1998 年～1999 年

- 自分にとって最も印象深い写真展。ピューリツァー賞は、アメリカの新聞王ジョセフ・ピューリツァーにより 1917 年に創設、コロンビア大学にある委員会により選考される最も権威あるジャーナリズムの賞。1942 年に写真部門が新設された。
- なぜピューリツァー賞写真展を企画したか。20 世紀が幕を閉じるにあたって歴史を振り返る 2 つの写真展を企画した。ひとつがマリリン・モンロー展、もう一つがピューリツァー賞写真展。
- 55 年分の写真の著作権調査は困難を極めた。すでに亡くなっているカメラマンもいれば、当時著作権を持っていた新聞社や通信社がつぶれていたなど、調査段階で何度も挫折しかかった。その間上司は何人も代わり、他の仕事の合間にやっていたので、大変だった。
- 構想から展覧会まで約 10 年を要したが、なんとか世界初のピューリツァー賞写真展を開催にこぎつけることができた時は嬉しかった。写真そのものを紹介するのはもちろんだが、どのような経歴の持ち主か、何故その場に居合わせていたのかなどカメラマンの人間像にも触れられる展覧会をつくりたかったので彼らのポートレートや略歴も展示した。
- 全国 12 都市を巡回し、老若男女 51 万人もの幅広い入場者があり、結果は大成功。東京での開催にあわせて受賞カメラマンが足を運んでくれた。
- かつては自分自身が表現をすることを目指していたが、他人が表現したものを展覧会の形で人に伝



えることで自分を満たすことができるようになった。またこの仕事を通じて改めてフォトジャーナリズムについて考えることができた。

フォトグラファーとフォトジャーナリスト

- 「事実の記録」が報道写真の最大の使命。深みのある写真を撮るためには写真家自身の世界観が必要。
- 戦争は生と死が集約された世界、そのなかにいると次第に感覚が麻痺してしまう怖さがある。フォトジャーナリストは極限状況のなかで、写真を撮るべきか、人命を取るべきかの選択をしなければならない時がある過酷な職業。
- 人が不幸な状態にあるとき、それを撮ることは難しい。(阪神淡路大震災のときに写真が撮れなかった若い女性のエピソード)しかし、1 枚の写真が考えるきっかけ、行動するきっかけとなることも事実。(ベトナム戦争の爆撃でやけどを負い、逃げまどう少女が後年国連の平和の大使として活躍しているエピソードなど)記録すること、そして伝える事がカメラマンの使命、仕事。
- 写真は時代や状況を映し出す情報の宝庫であるが、撮った人、撮られた人の人生が変わってしまう場合がある。写真はそういう影響力も持っており、インパクトが強いほど、イメージが一人歩きする。イメージに思考が閉じ込められ

てしまいがちだが、記録された瞬間の前後に何
が起きたか、そこに写っていないものは何か、
それを知る、想像することが必要ではないか。

「地球を生きる子どもたち」写真展 2005 年

- 日本テレビ時代、最後に企画した写真展。世界中
の子供達の不幸な状況に目を向け、未来を考えて
欲しいという思いで制作した。赤字を出してしまった
が、それなりの評価をもらい、やって良かったと
思っている。

まとめ

- 今という時代は人間も社会もすべてが薄くな
った。IT文化が世界中を支配し、直接の対話
ができない、信頼できる人間関係を構築できな
い、辛さや不幸に対峙できない、そんな人が増
えた。写真を撮ることも同じ。一枚の写真を撮
るためにもっと時間をかけるべきで、相手が人
間だったら十分なコミュニケーションが大事
ではないか。
- 今の若者は本も新聞も読まず、テレビも見ず、コン
ピューターの画面に向かっていただけと言われる
が、大学などで写真を見せると目が輝いてくる。沢
山の写真をみることで、感性と知性のある人間が
つくられ、良い社会の創造につながるのではない
かと考えている。



質疑応答

Q.ジャーナリストは本来幸福を目指しているは
ずなのに、一方で大きな事件、不幸があること
を心のなかで望んでいるのでは？

A.報道の現場では、事件が大きければ大きいほど、
騒然とした状態になる。「他人の不幸は蜜の味」
という言葉があるが、不幸を報道して商売して
いる側面は否めない。しかしながら、私が言う
「暗いものに目をむける」はそうした意味では
ない。戦争報道などにおいて、現場の状況から
視点が偏ってしまうこともある。メディアの
つくる映像を見るときは注意が必要。

Q.フォトジャーナリストをめざす大学生ですが、
今のうちからどのようなことをしておくとし
いでしょうか？

A.音楽、絵画、映画などを通じて学ぶ、自分のス
タンスを形成する。技術的に写真が上達するこ
とよりも、歴史や政治について知り、どんな写
真を撮りたいのかを自分で知ること。

Q.おすすめの映画は？

A. C.イーストウッド監督の「父親たちの星条旗」
と「硫黄島からの手紙」は日米それぞれの視点で
作った。比べて見ると興味深いと思う。その他は
今岩波ホールで上映中のポーランドの A.ワイダ
監督による「カチンの森」など。

Q.日本において写真をめぐる環境を今後どう
育てていったら良いか？

A. 写真はまだメジャーな文化として定着してい
ないように思う。私は写真家たちが活動（発表）
していくことが最も重要だと思う。地方の小さな
美術館やギャラリー、公共施設に併設している展
示スペースなどを活用して、「良い写真」を頻繁

に人々にみせてゆくことが必要。仲間内だけの展覧会ではなく、知らない人に写真をみてもらうため、たとえば配布用のリーフレットをつくる事などからはじめてはどうか。やれることは沢山ある。

早川さんの語り口は明快で淀みない。「自分は写真家でもなく写真評論家でもない」とおっしゃるが、写真の力を信じ、一生懸命道を切り開いてきたパイオニア精神と情熱が言葉の端々から伝わってきました。

写真には大きな力がある故に、無意識のうちに誤った印象が刻み込まれてしまう怖さもあります。大量の映像に取り巻かれて暮らす現代においては、単に感覚的に眺めるのではなく、批判的かつ多面的に写真を読み解く眼を養うことが求め

られていると教えられました。

世の中の「暗いもの」「負のもの」を直視することは強い意志がなせる業であり、残念ながら私達においてはそうした意志はやや薄弱です。しかし確たる世界観を養うことが深みのある作品へとつながるというアドバイスは、フォトジャーナリストに限らず、ともすると技法に集中しがちな私達にも共通する重い戒めだったのではないのでしょうか。



講演後の懇親会にて（中央：早川氏）

[表紙の作品]

- ・ 作者：古谷津純一
- ・ タイトル：a symphony（交響楽）
- ・ フィルム：8x10
- ・ レンズ：190mm
- ・ 絞り：f32
- ・ シャッター：1/10 秒
- ・ キーゾーン：白い波頭（VIII）
- ・ シャドウ：砂浜（IV）
- ・ ハイライト：寄せる波（VII）